

犯罪被害者の心理と援助

東京医科歯科大学 山上 皓
難治疾患研究所

はじめに

近年、我が国においても、犯罪被害者支援への社会的気運が急速に高まってきた。早くから被害者支援活動に関わってきた者の一人として、活動の流れを振り返り、社会的支援として何が求められているかについて、述べてみたい。

1. 全国被害者支援ネットワーク

私は8年前に大学の一室で、犯罪被害者のための相談活動を始めた。ある交通被害遺族の方の切なる願いを受けてささやかに始めた活動であったが、今では15都道府県の民間援助組織が「全国被害者支援ネットワーク」のもとで協力して、被害者支援活動の全国的展開を目指すまでに至った。

2. 犯罪被害者相談室設立の経緯

私はもともと犯罪および犯罪者の精神医学的研究を本務とする精神科医であるが、10年前にアメリカの犯罪対策を視察した際、アメリカ社会が犯罪被害者の保護と支援に、積極的かつ組織的に取り組んでいる事実を知り、このことが後の相談室の開設へとつながったのである。

3. アメリカにおける被害者支援発展の経緯

現在ではすでに社会システムとして確立しているように見えるアメリカの被害者支援も、その歴史は僅か30年ほどに過ぎない。専門職として犯罪被害者に触れる機会を多く持つ医師や看護師は、被害者支援の発展過程において重要な役割を果たし、また、PTSD概念の確立にも貢献した。

4. 相談活動から分かってきたこと

手探りで始めた活動であったが、相談室への相談件数は、その活動が知られるに連れて、年々大きく増加した。殺人事件や交通犯罪の被害者・遺族、暴力犯罪や虐待・いじめの被害者、強姦や性暴力の被害者など、相談の内容は多岐にわたる。被害者遺族は心に大きな傷を受け、何年も孤立したまま苦しんでいることが明らかになってきた。

5. 被害者に見られる一般的心理的反応

過酷な被害体験の後で、被害者の多くは、内部に生ずる強力で混乱した感情的反応に対応することを迫られる。被害体験の記憶の反復想起、再体験、意識的・無意識的回避、覚醒亢進症状など一連の症状が見られることが多いが、症状の程度が重く、長期間持続するときには、PTSD（外傷後ストレス障害）と診断され、専門的な治療が必要とされることがある。

6. 二次被害

多くの被害者は、事件の後で、さらに次のような様々なストレス要因に曝される。①身体の傷に対する診察、検査等、継続医療等、②警察による事情聴取、その他司法当局との様々な関わり、③状況や立場の変化に伴う、新たな役割負担や生活技術習得の必要性。これらは被害者の心をさらに傷つけて二次被害をもたらす。

7. 初期のサポート

初期のサポートの重点は、傾聴することによる被害者の感情の発散（ベンチレーション）、トラウマによるストレス反応についての説明（理解）、罪責感の解消、適切な助言や紹介、などに向けられる。

8. 医療機関で出来るサポート

医療関係者は、事件後間もない時点で、強い感情的反応のもとで精神的に脆く、傷つきやすくなっている被害者に接する。適切な対応は、被害者の苦痛を和らげ、回復を促す役割を果たすが、配慮に欠けた不適切な対応は、二次被害となって被害者の心をさらに傷つけ、回復を困難にすることもある。一昨年私たちが行った被害者調査で、医療機関の対応について記されていた感想を紹介し、問題点について検討を加えたい。

9. 交通被害者の抱える問題

被害者・遺族の抱える問題には、被害類型によって異なる特徴がある。交通被害者に特徴的な問題をいくつか紹介し、対応のあり方について検討を加えたい。

おわりに

交通医学・工学領域の専門家には、その専門性を生かして犯罪被害者・遺族の心のサポートに貢献できることが多くある。皆様のご協力を期待したい。